

新建・寺子屋 (モダニズムの研究) 261 報告

近代建築を多角的に検討／モダニズム建築文献再読；

2019.5.15

藤森著『日本の近代建築(上、下)』分析を終えて 1.5

とりあえずの企画「三沢研の仕事をスライドで」(特別編) 第 1.5 回

■ 寺子屋 261 は 5 人の参加でした。

■ 今回は当初の予定を変更して、三沢浩氏が 1960 年に設計したアトリエ住宅である国田邸に今現在お住まいのお二人に、多くのお話を聞く機会としました。

そのための(特別編)第 1.5 回です。

■ お二人は数年前に旧・国田邸を国田氏のご子息から購入されたとのこと。購入に際しては、一目見て気に入る、設備などを除いてはほとんど元のままに、仕事場としても使いつつ、暮らしておられるそうです。

その空間に大きな可能性を感じて、その設計者である三沢氏のことを調べているうちに、寺子屋のことを知って、今回、参加してくれました。

■ 国田氏による改修がいくつか予想できるところもあるとのことですが、非常に簡素でありながら豊かな一つ一つの空間と、それらをつないだり、大きな空間と小さな場のつながりを演出して関係性をつくり出しているところなどは、レーモンドの 5 原則にも通じるモダニズムの規範性を感じます。今回は写真でだけでしたが、機会があれば現地を見せていただけたらとのこと。

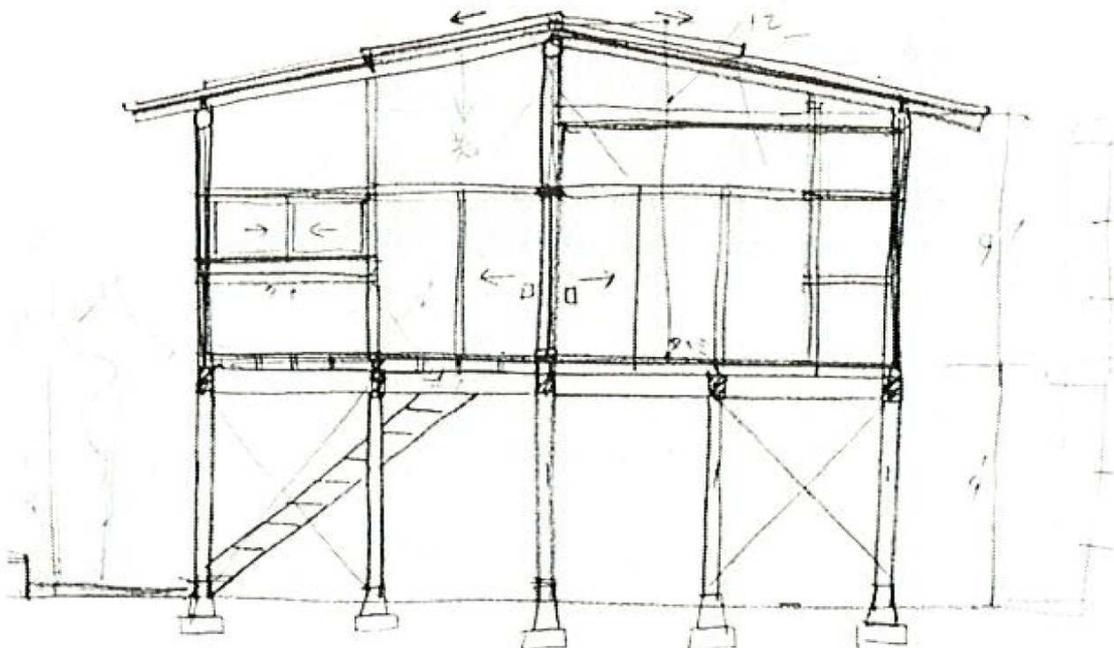
まもなく還暦と同じ 60 年を生きてきて、今なお生き続けるモダニズムの本質について、もう一度、見直していきたいと思います。

三沢浩著『住まいのいろは』三和書籍、2011 年
「そーそらをとりにもう (国田邸／一九六〇) No.27
(抜粋)

「考えたのは1階はピロティにして、パイプ類だけでまてて立ち上げ、一度道から敷地に下がり、開けた側に階段をつくって北側から入る。道に面しては、中二階以上の西側の窓を開けて光をとる。南は窓があっても隣家の方が高くて、光はとれても風景はない。東側もだめだから、かくなる上は居間に切妻の棟を見せ、そのまま天井を張って船底で高くする。そして西に向かう勾配屋根は、二畳分のトップライトをとって明るくしようと考えた。」(p.80)

「ピロティの方は四寸角が並んで壮観だったが、いつの間にか画家のアトリエになっていった。次々に描く絵を格納する場所も必要になった。この部分の増築は、母家があるから土間の上に土台を置き、間仕切をつけばなんとかアトリエはできる。」(p.81)

国田邸に天窗を(断面スケッチ)(p.79)



次回 <寺子屋 262> ■近代建築を多角的に検討■モダニズム建築に関する著作再読

近代建築から現代建築へ—「三沢研の仕事をスライドで」 第 2 回

話：三沢浩

2019 年 6 月 12 日 (水)

PM 7:00~

場所：新宿区水道町 2-8 長島ビル2階(江戸川橋駅神楽坂駅徒歩5分)

会費：400 円 問合せ：大崎元 (有)建築工房匠屋 VED03705@nifty.com